

第二章  
郷土の人物



## 大間群像

人々の生活と、歲月の流れによっていつか築かれてきたものが、歴史であり文化である。しかしその歴史や文化には、気候や農漁業などの天然資源に恵まれていたか否かなど、生活環境のよしあしによってかなりの差が生じてくる。また、地理的環境から生じる住民の土着性による影響も見逃せないだろう。大間の例でいえば、生活環境を見ると東北を海に接した半島突端の町であり、漁業には恵まれたが農業面ではほとんど目ぼしいものが見られない。季候も厳しく、自然災害も少なくない。その上、地理的環境面では本州最北端の集落という条件が付加され、本州から北海道へ、北海道から本州への交通に関しては「人的流通」が多くあったものの、この町にどっしり腰を据えて永住しようという人々は、他地方からの移住者を含めてもかなり限られた人員に違いない。つまり、大間にあつて一定の居住形態を保ち、そこに代々の生活基盤を置いてきた戸口・人口は、決して多くはなかった。

大間の寺院や仏閣の歴史が比較的浅いのも、その永住性の希薄さと無縁のものではないはずであり、それなりに古い歴史がある町にもかかわらず、民俗文化財や伝統芸能の数が乏しいのもそのためであろう。

そこで「郷土の発展に貢献した人物」を選定する場合、出生から没年まで判然としている人物の功績・偉業を証す詳細な資料が乏しいという結論になるのもやむを得ないことといえよう。ただし、前述のような地理的環境であつたため、この地を通過したり、目的を持って訪ねたり、この地で歴史的仕事を成したという、いわば大間と貴重な接点を持つ著名人は少なくない。

この章では、可能な限り「大間の人物」を幅広く選び出し、そこに「大間ゆかりの人物」を併記して「郷土の人物」の紹介としたい。

## 一 大間の人物

## 伊藤五左衛門

梁札に「元禄九年（一六九六）七月、天妃馬祖大権現渡海自在郡内安全所建立」とあり、棟札には「享保十一年（一七二六）九月二十三日（当時大間の名主だった五左衛門が村の守護神として）天妃大権現祠建立」とある。一五歳で大間に住み、船乗りから村長にまで出世した薩摩男児で、肝煎を務め村民から「川向かいの家」として一目置かれる広大な屋敷に住んでいたという（第一〇章「宗教」第一節参照）。

## 能登屋市左衛門

松前から移住してきた家柄で、岩佐又兵衛作といわれる「洛中洛外図」の金屏風を家宝としていた。代々、村長老として神社仏閣によく奉仕し、享保十五年（一七三〇）に百滝稻荷大明神を勧請し、文政三年（一八二〇）十一月七日には金毘羅大権現を自宅に祀ったと記録にある。能登屋は代々能登屋市左衛門を名乗り、江戸期の回漕業をはじめ明治・大正・昭和前期まで△新田家として海運業界に足跡を記した。

## 菊池金吾・雄太郎

菊池家九代目庸棟、通称を金吾。文政三年（一八二〇）生まれ、明治三十一年（一八九八）十月三日没、七八歳。博学多識の人で明治維新後に身を興し、常に県政の要職にあつて大きな功績を残した。大畑から大間へ移住

してきたのは明治二十五年ごろで、明治六年第三中学区取締、同六年第一六中学区大畑小学一等学校掛、同十一年青森県第二課農事通信員、同十三年県会議員、同十六年下北郡三四か村連合会議員などを歴任した。また蔵書家としても著名で、明治十年に修史館へ大量の書籍を献納して県から礼状を受けたのをはじめ、各種教育事業、救済事業、諸官庁への寄付なども枚挙にいとまなく、昭和八年（一九三三）には大間小学校に大量部数の漢籍・史籍を寄贈している。

雄太郎は庸棟（金吾）の長男で、没年の昭和八年以外は不詳。若くして雄飛の志に富んでおり、明治初年には率先して北海道へ渡り、本島開拓に努めた。明治十三年には道北の宗谷・枝幸えさき両郡の戸長となり、土地の発展に寄与。帰郷後は大畑村長、大間小学校教員となり、学校と村の指導者として貢献した。

#### 山崎屋弥兵衛・米澤小太郎父子

江戸時代後期の大間村肝煎。弘化四年（一八四七）の『大間浦の記』を著し、当時の大間村の詳細を紹介している。小太郎氏は村会議員で、稲荷神社の世話役を務め、境内地の寄付などもしている。

#### 伝法屋（武内家）

村の文書の保存に尽力し、現存する『武内家文書』二〇〇点余は貴重な歴史資料である。回漕業も営み、五十集札、掛硯、建築物、仏具、庭園などの文化遺産も多く残している。その屋敷には大名が休憩した記録もある（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

## 熊谷権四郎

松前藩指定の旅館のほか、仲買い・回漕業を営み、明治初年には二隻の弁財船を所有。明治五年（一八七二）七月には大間八三番地で郵便業務を開始した（第二章「大間町の歴史」第四節参照）。

## 竹内安五郎

古くから「坂の上の家」といわれ、明治二十三年（一八九〇）大間地区の初代区長（総代）、大間稻荷神社総代、初代大奥村村会議員、三十六年三月漁師組合長、三十八年八月大間火防衛生組合長、三十九年五月消防組頭などの要職に就き、大間発展に功績があつた（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

## 佃栄太郎

嘉永元年（一八四八）五月二十二日生まれ、明治二十五年（一八九二）一月三十一日没、四四歳。大間の漁師で、明治十七年に弁天島沖を回遊する鱣かまの大群を発見し、延縄漁はななわの仕掛けを研究、試行錯誤の末に特殊な鉤かぎを完成させた。大奥村初代村村会議員（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

## 熊谷寛三郎

乾鮑の製造と技術開発に没頭し、熊寛鮑製造所を完成、大間鮑の名を世間に広めた。消防団長の要職を長く務め、北海道で漁場を開いた（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

## 須藤松雄

新潟県出身の軍医で、明治三十三年（一九〇〇）以降、昭和九年（一九二四）二月十五日死去まで大奥村村医、大間小学校校医、在郷軍人会会長を歴任。大正二年（一九一三）大奥村村会議員、下北郡医師会副会長、昭和二年県医師会議員、同八年には教育功労者として表彰された（第九章「伸びゆく社会福祉」第二節参照）。

## 廣谷六郎

嘉永元年（一八四八）五月二十二日生まれ、昭和二十年（一九四五）十二月二十九日没。易国間出身で大間に住み、晩年は佐井村に転出。膨大な山地を所有して森林業を営むかたわら、大奥村会議員、下北郡会議員、青森県議会議員二期を歴任。大間港の築港に尽力した。大奥村名誉助役、大間漁業組合長、大間稻荷神社氏子総代を務め、大奥村発展に尽力した（第二章「大間町の歴史」第四節参照）。

## 黄<sup>きがね</sup>金屋茂兵衛

寛保年間（一七四一〜四三）に能登より初代茂兵衛が本村に移住し、現戸主興村幸太郎まで一代続く旧家で、六代目から興村姓となる。大森林を保有して大間を代表する殖産興業の経営に努力するかたわら、区長・総代を代々務め、村の発展に寄与してきた（第二章「大間町の歴史」第四節参照）。

## 宮野慶吉・正太郎父子

天保十三年（一八四二）生まれ、明治二十三年（一八九〇）十一月一八日没。

質実剛健の徳行者であり、村民の人望を集めてきた義狭の名士として知られる。明治二十三年、奥戸村の総代のとき、隣村の大間と鮑の漁場問題（鮑の突き場所）がもつれにもつれ、暗礁に乗りかかった。ここで漁民代表として大間へ赴き、熊谷権四郎宅の旅館で双方の話し合いが行われ、闘志あふれる激烈な宮野慶吉の説得力が効を奏し、円満解決の寸前というところで急死を遂げた。彼の名声がさらに高まったことはいうまでもない。

正太郎氏は父の志を継ぎ、村総代として村区会議員を兼ね、春日神社総代などの要職に就き、その性剛毅活達にして村のために努力した（第六章「交通・通信」第二節参照）。

#### 安東元格

嘉永四年（一八五二）一月五日生まれ、大正十五年（一九二六）一月二十四日没、七五歳。明治七年（一八七四）、青森県済衆病院田名部分院長。同三十二年、奥戸区医（大奥村村医）として開業。奥戸小学校校医（第九章「伸びゆく社会福祉」第二節参照）。

#### 小林弁太・弁太郎・唯八

親・子・孫三代の研究で鮑網の発明をした（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

#### 清水時次郎

頭脳明晰の実業家で、奥戸村会議員、学務委員のかたわら、明治三十八年（一九〇五）には水車を、大正三年（一九一四）には奥戸河畔に経木工場を造り、同四年には奥戸港に必要な荷揚げ用の栈橋造りに尽力した。

岩瀬千代八

大奥村会議員、奥戸漁業組合長、春日神社氏子総代。昭和四年（一九二九）、奥戸大川目の水田の耕地整理組合工事を起工し完成させた。春日神社境内に記念の石灯籠一对と鳥居が献納されている（第五章「産業経済の興隆」第三節参照）。

## 二 大間ゆかりの人物

菊池成章

延享元年（一七四四）生まれ、文政三年（一八二〇）没、七六歳。九州の菊池氏の後裔といわれ、名を泰作、成章と号した。田名部代官所の御勘定所、御山奉行を務める禄高一〇〇石の役人で、文筆・短歌に優れ、大間と奥戸の牧場調査の際『牧の下草』を著したが、名文の誉れが高い。大間在住の間、大間にかかわりのある五首を詠んでいる。

けふの日の暮れぬとつくるかねをなみ

磯にうちよる音のかなしさ

親と子のはなれかたみに引駒の

なごりたちそふまきの秋風

きのふまであおかりし葉も時のまに

しぐれの色のみつのみやしろ

よなよなにかはる枕もあすか川

あすはふちせをたれにさだめん

とる駒のみまきの草も萬代に

しげき増れとたねは尽めや

#### 一戸五右衛門

宝暦年間（一七五一―一六三）、当時の藩主に大間野・奥戸野の御馬別当を任命された人で、現在も尻屋に残っている寒立馬を育てた功労者である。そのころ、厩舎で飼われていた馬は、冬季になると東通りや西通りの農家に委託し、雪解けの春まで飼育を任せていた。これが農家の苦痛の種になっている状況を見かねた五右衛門は、藩主に願い出て馬の四季飼いに挑戦。極寒と豪雪で数十頭の馬を犠牲にする年もあったが、枯木を燃して暖をとる、雪上に餌をまいて馬を鍛え、ついに冬を越せる強靱な馬の飼育に成功した。この功によって五右衛門の給料は一〇倍にはね上がったという。

#### 伊能忠敬

延享二年（一七四五）生まれ、文政元年（一八一八）没、七三歳。日本最初の実測地図を作った地理学者・測量家。幕府の命によって寛政十二年（一八〇〇）に蝦夷地から測量を開始し、翌享和元年（一八〇一）十月二十日、みぞれ雪と大風の悪天の中を易国間を出発、二十一日には大間と奥戸を通過して佐井に向かっている。

## 最上徳内

宝暦五年（一七五五）生まれ、天保七年（一八三六）没、八一歳。探検家。天明五年（一七八五）にクナシリ、エトロフなどの島を調査。寛政十一年（一七九九）三月二十七日、千島調査の帰途大畑経由で奥戸に宿泊。文化四年（一八〇七）には大目付の遠山金四郎、普譜没最上徳内の一行が大間・奥戸・佐井に足を止めている。

## 白井秀雄（菅江真澄）

宝暦四年（一七五四）生まれ、文政十二年（一八二九）没、七五歳。三河国の人で国学者・紀行家。藩の菓草園に勤めていたが、天明三年（一七八三）に北をめざして旅立ち、以後四〇年近く奥羽・蝦夷地を遍歴。その見聞記を『菅江真澄遊覧記』七〇巻にまとめたが、これは当時の民間生活の記録として民俗的にも非常に優れ、貴重な資料である。菅江真澄の筆名が有名だが、大間の奥戸に着いたときは三九歳、菅江真澄と名乗ったのは五〇歳を過ぎてからであり、下北を旅していたころは白井秀雄を使用していたものと思われる。

蝦夷地からの帰途、寛政四年（一七九二）十月七日に奥戸の船問屋小谷七衛門宅へ宿泊。翌日は奥戸から材木を通り、八幡神社に詣でて奥戸へ戻り、翌日も雨に降られて一泊。十日に奥戸の牧場を通った際は、牧の柵が虹のように見えたと書いている。大間の牧に入って中山越の道を通り、左賀森の磯・高岡に出たら磯辺に大間の町並みがよく眺められたとの記述もある。

寛政五年（一七九三）三月二十三日、真澄は大間で『大間天妃縁起』を書いている（第一〇章第一節の第三項「大間の信仰」参照）。

真澄が詠んだ大間ゆかりの短歌七首を紹介する。

日は西に入とし見れば弓張りのつきぬ恵ぞあま照らします（奥戸湊）

あさ風の身に寒からんうちむれてをこべ峰越駒ぞいばへる（呼胡遍）

しおがまの神の悪はみちのくの奥の浦人猶あふぐらし（塩釜大明神）

こやさゆる山かげならじ昼さへもくさのはつかに残る朝霜（材木）

ときのまにこなたは晴れて海越の山にしぐるる色をこそ見れ（松前の雨の山々）

あさ日影巴う方よりとけそめて霜おく山に露むすぶなり（左賀森の笹原）

飯形山のうつす末葉の末までもさかふるしるし松やさかへん（百滝稻荷）

秦はた  
檮あむら  
丸まる

安永九年（一七八〇）生まれ、文化五年（一八〇八）没、二八歳。伊賀国宇治山田の人で別名を村上鳴之丞。

画家で地理にも精通し、幕府の役人に随行して絵図を多く残した。『陸奥州駄路図』のうち奥戸湊・大間湊の絵図には、

奥戸湊は一〇二戸。良材・駿馬・鮑白子を産する（略）大間までの距離は一里一九間。湊は深くアイ風、タバ風は懸かり悪し。

大間湊は四〇戸。駿馬・鮑白子・干いわしを産し（略）問屋は佐々木屋、淡路屋、蛇浦まで一里二三町五〇間。など、奥戸牧や大間牧の様子が丁寧に紹介されている。ほかに『蝦夷島奇観』など有名な作品が多く、絵の色使いも美しい。

漆戸茂樹

寛政元年（一七八九）生まれ、明治六年（一八七三）没、八十四歳。盛岡藩新当流師範役。天保九年（一八三八）に巡見使御用として書いた『北奥路程記』という絵図で、材木村を次のように細かく説明している。

材木は家が二三軒。村を出て小坂あり。その向こうに稲荷の祠あり。右には地藏堂。少し行くと左に新釜大砲場あり、この辺りは海岸が険しく、ここまでが二七四間なり。それから赤石大明神の崎あり。ここより六六〇間行くと小坂あり。黒岩崎という大砲場あり、この新大砲場より奥戸入り口まで四一六間なり。この辺、右は天狗山・松木立、左は野山・畑があり奥戸に至る。

松浦武四郎

文政三年（一八二〇）生まれ、明治二年（一八六九）没、四九歳。北方探検家・開拓者。伊勢須川村の人で本名は弘。二七歳から蝦夷地を六回探険し、佐井・田名部間も三度取材している。材木・奥戸・大間はじめ下北全域を詳細に記述した弘化二年（一八四五）刊行の『東奥沿海日誌』が有名である。

新渡戸十次郎

文政三年（一八二〇）生まれ、慶応三年（一八六七）没、四七歳。盛岡藩士で大間の高磯崎砲台図を安政二年（一八五五）に描いた人。開墾や道路造りでも功績があった。

大間の会津藩士

会津から大間に移住した会津藩士家には木村家・阿部家・高畑家・鈴木家・羽生家・山田家・松原家・真柄家などがある。

木村家は藩主容大かたはるとともに斗南ヶ丘に居を構えたが、廃藩置県後に重孝が大間支庁詰となっていた関係上、一家全部が大間に移住した。重孝は大間戸長、その長男重功は少年のころの明治九年（一八七六）、明治天皇の東北巡幸の際、田名部校四人の学生代表の一人として天皇の前で万国地図問答をご覧に入れ、賞として金一円を賜った。長じては佐井戸長、大奥村村会議員、大間区会議員などを務めて村の自治に尽力。明治二十年から大正七年（一九一八）まで大間郵便局長を三〇年間勤続した功労によって正七位勲六等に叙せられた。

阿部家は会津城落城後直ちに大間へ移住し、高畑家は大畑から、松原家は正津川から移住してきた。とりわけ高畑熊三郎は明治二十三年の市町村制発布以来、大正二年に死去するまでの約三三年間、大奥村長として村政に大きな功績を残した。

大間・奥戸・材木地区の旧家と現戸主

〈大間地区〉

⊗ 若狭屋（小浜幸一）

佐々木屋（不詳）

塩飽屋（七島）

江戸屋（不詳）

⊙ 伊藤屋（伊藤利一）

□ 淡路屋（山本あき）

△ 能登屋（新田繁）

⊕ 伝法屋（武内昭夫）

△ 山崎屋（米沢ふじ）

△ 嶋屋（島芳朗）

カサキウジ  
㊦ 蛭子屋 (蛭子研三)

カクサン  
㊧ 伊藤 (伊藤鉄雄)

ヤマカセ  
㊨ 蛭子 (蛭子・北海道ウトロ移住)

イゲタマル  
㊩ 金澤 (金澤弘康)

〈奥戸地区〉

カネイキキコ  
㊰ 仙台屋 (仙台タキ)

マルニ  
㊱ 伊勢屋 (麴屋) (竹内はつ)

キユウニ  
㊲ 高橋 (高橋 仁)

ワンドシ  
㊳ 紀国屋 (紀国喜一)

カダ  
㊴ 能登 (能登新市)

マルニ  
㊵ 高松 (高松 直)

マルニ  
㊶ 林 (林 善亨)

リカクイ  
㊷ 柳谷 (柳谷あさ)

ヤママン  
㊸ 小谷 (茨城県大洗町長小谷隆亮)

マルニ  
㊹ 加賀屋 (金澤輝光)

マルニ  
㊺ 黄金屋 (興村幸太郎)

ヤマキ  
㊻ 岩瀬 (岩瀬和平)

マルニ  
㊼ 小林 (魚屋) (小林唯八)

ヤマキ  
△ 山田 (小宿) (山田義一)

〈材木地区〉

ヤマキ  
△ 菊池 (菊池栄五郎)

マルニ  
⊕ 佐々木 (佐々木重造)

ヤマキ  
㊽ (佐々木公平)

イカキキコ  
王 (能登栄太郎)

## 受章者一覧（昭和43年以降）

氏名	主管	勲等	年度
佐々木浩造	消防功勞	勲七等青色桐葉章	昭和43年
菊野 敏美	消防功勞	勲七等青色桐葉章	46年
矢越 甚蔵	消防功勞	勲六等瑞宝章	48年
岩瀬武三郎	消防功勞	勲六等单光旭日章	49年
大西善太郎	自治功勞	勲五等瑞宝章・従六位	50年・57年
小谷 菊市	消防功勞	勲六等瑞宝章	50年
駒井 正雄	消防功勞	勲七等青色桐葉章	51年
伊藤 勇吉	消防功勞	勲七等青色桐葉章	52年
伊藤 重喜	消防功勞	勲七等青色桐葉章	57年
熊谷 忠造	自治功勞	勲五等瑞宝章・正六位	58年・平成4年
島 長次郎	消防功勞	勲六等瑞宝章	59年
手塚 国美	自治功勞	勲六等瑞宝章	59年
松原 孫衛	自治功勞	勲六等瑞宝章	61年
石澤 徹	厚生功勞	勲五等双光旭日章	62年
菊池 武夫	自治功勞	勲五等瑞宝章	62年
松本 秀雄	消防功勞	勲六等瑞宝章	62年
新田 義一	自治功勞	勲六等单光旭日章	55年
和田 英夫	気象庁功勞	勲三等瑞宝章	平成元年
大見 義美	自治功勞	正六位勲五等双光旭日章	2年
佃 勝文	消防功勞	勲六等单光旭日章	2年
稲葉 末作	高齢者叙勲	勲六等单光旭日章	3年
泉 忠進	自治功勞	勲五等瑞宝章	3年
高橋 利助	厚生功勞	勲五等瑞宝章	3年
蛭子富二夫	自治功勞	勲六等单光旭日章	4年
小谷信千代	自治功勞	勲六等单光旭日章	4年
菊池栄五郎	消防功勞	勲六等单光旭日章	4年
笹谷 賢治	自治功勞	勲六等瑞宝章	5年
小谷 傳	消防功勞	勲五等瑞宝章	5年
宮野慶毅司	高齢者叙勲	勲六等单光旭日章	5年
木村 功	高齢者叙勲	勲五等瑞宝章	5年
正根 政雄	自治功勞	勲王等瑞宝章	6年
宮野 正男	自治功勞	勲六等单光旭日章	7年
佐々木清喜	消防功勞	勲六等单光旭日章	8年

注) 昭和43年以前については年表参照